

# 「人力」と「蒼古」の共存

西欧、とりわけフランス式の庭園が特定の中心や軸線を支えとする造形を志向するのに対して、日本の庭園では、視点の移動とともに相貌が移り変わることに重要な意味があります。散策する人の経験と一体の風景として庭を理解するならば、庭づくりは、人びとが理解する日本の風土、すなわち「自然」を見立てる妙技といえるでしょう。

回遊式庭園の代表格に位置づけられる金沢の兼六園には、有名な花見橋の菊桜、梅林、唐崎松、霞ヶ池のモミジなどのほかに、合わせて160種もの樹木があります。多様な緑の背景をなすのは、兼六園の名前のモチーフとされた6つの特質です。宏大(開放性)と幽邃(奥深さ)、人力(手入れ)と蒼古(さび)、水泉(近景の池・滝)と眺望(遠方の山並み)という対照的な概

念の中で、とくに、人力と蒼古の共存に注目してみましよう。兼六園は、人間の発想と自然の摂理の交点に成立した空間なのです。

船に乗って移動する人にとって印象深い中川運河の緑空間は、人間が用意した器に生態系が産み落とした独特の「自然」です。そうした理解を出発点として、中川運河の緑を育て、楽しむ作法がみえてこないでしょうか。



金沢・兼六園 (2002年6月撮影)

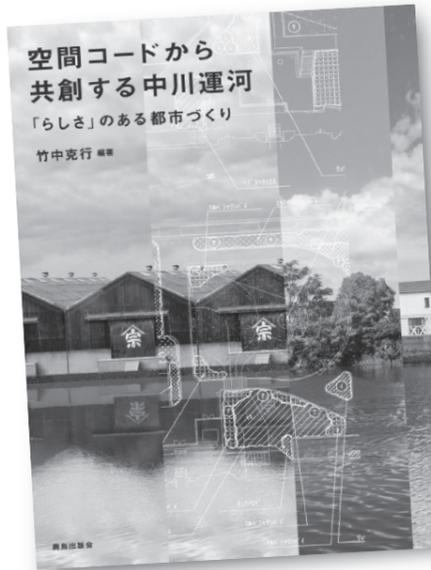
# 絵で見て考える中川運河の「らしさ」

都市の「らしさ」は、直感的にはわかっていても、言葉にしにくいものです。視界に収まらないスケールの大きな特徴、目前にあっても気づきにくいリズム、意識化されていない付き合いの作法など。

そうした言語化しにくい町の底流をつくる脈を可視化するために、『絵で見て考える中川運河の「らしさ』』と題する本シリーズを制作しました。

絵からヒントを得ながら、未来の都市づくりのために想像力を働かせましょう。

『空間コードから共創する中川運河』  
鹿島出版会 (2016年)  
ISBN: 978-4306073203、2,500円+税



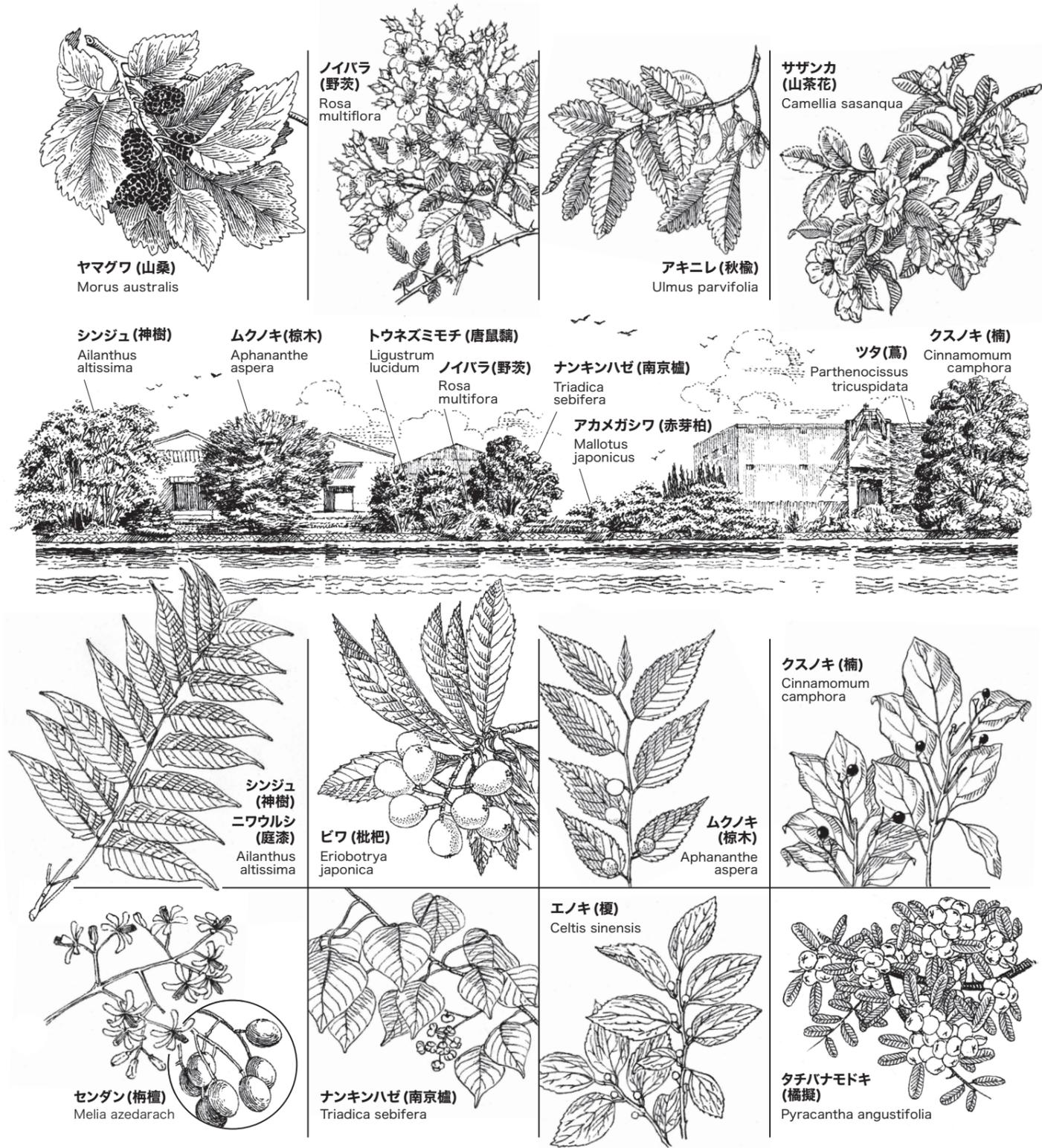
『絵で見て考える中川運河の「らしさ』』B3、2020年9月 制作・頒布：都市コミュニケーション研究所 (riuc.takenaka-lab.net)  
代表：竹中克行 (愛知県立大学教授)、イラストレーション：C.メツラー、解説：竹中克行、植物監修：長谷川泰洋、協力：上川夏林



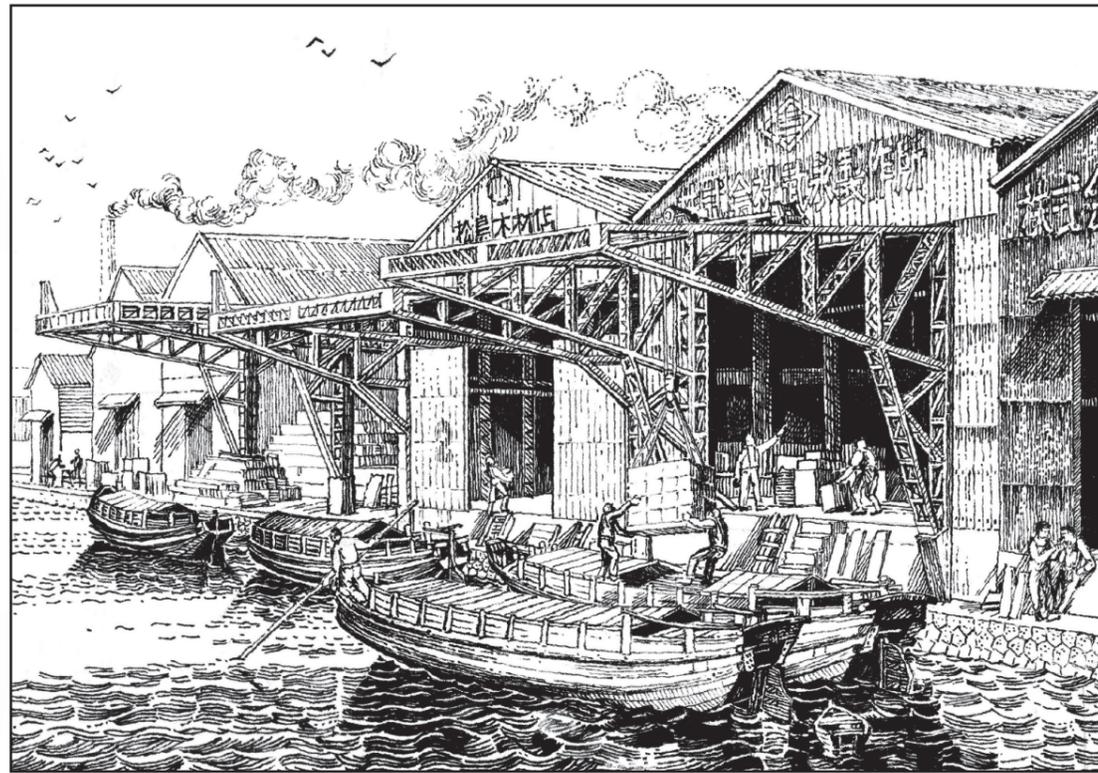
# 絵で見て考える中川運河の「らしさ」

## 中川運河の空間コード B3

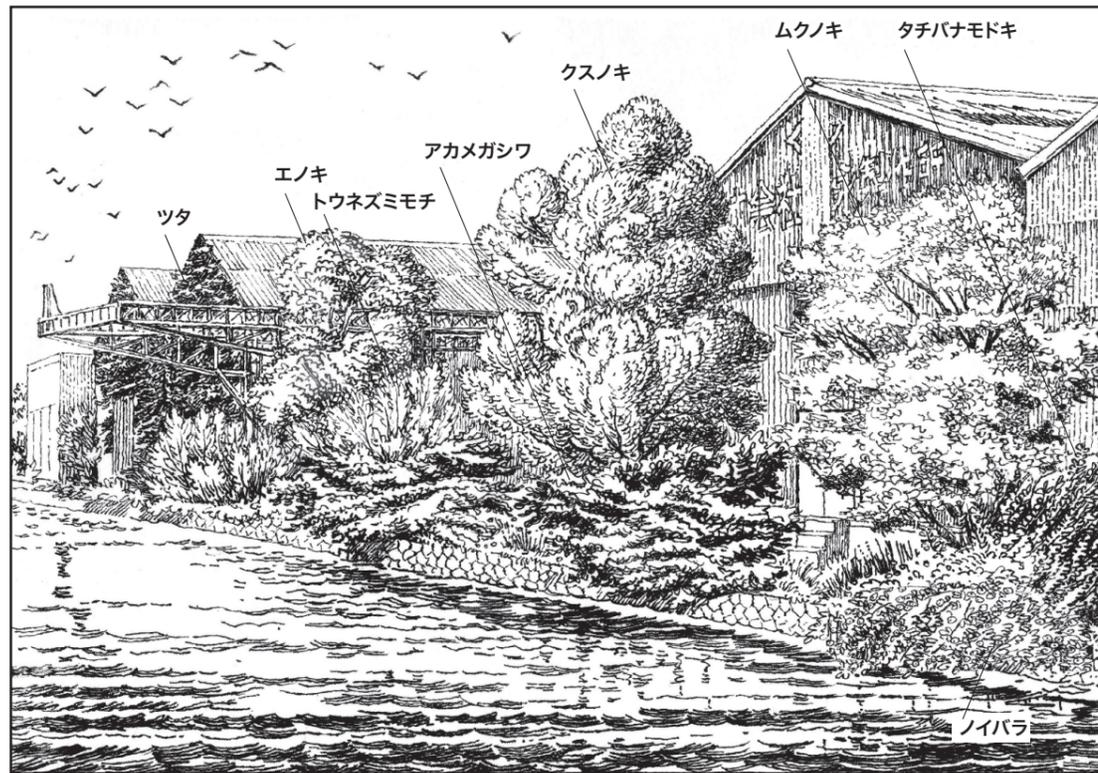
## 鳥と風が 都市環境に 馴染む「半自然」 運ぶ都市の緑



## 1960年代



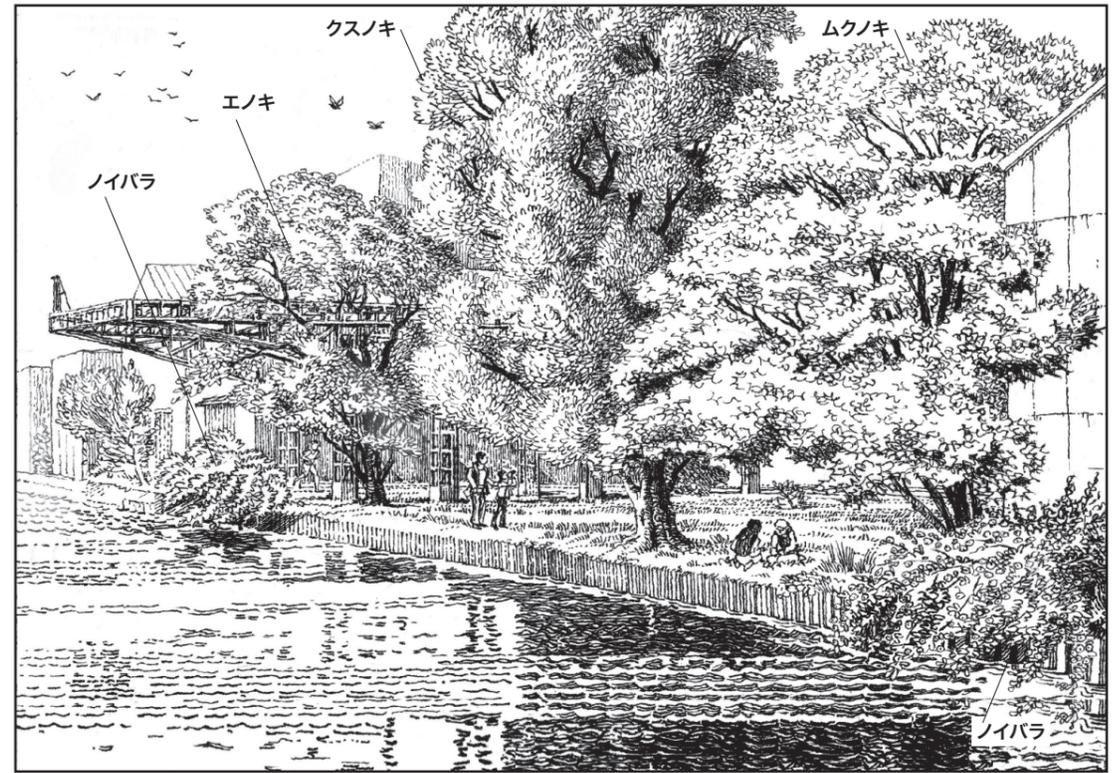
## 2020年現在



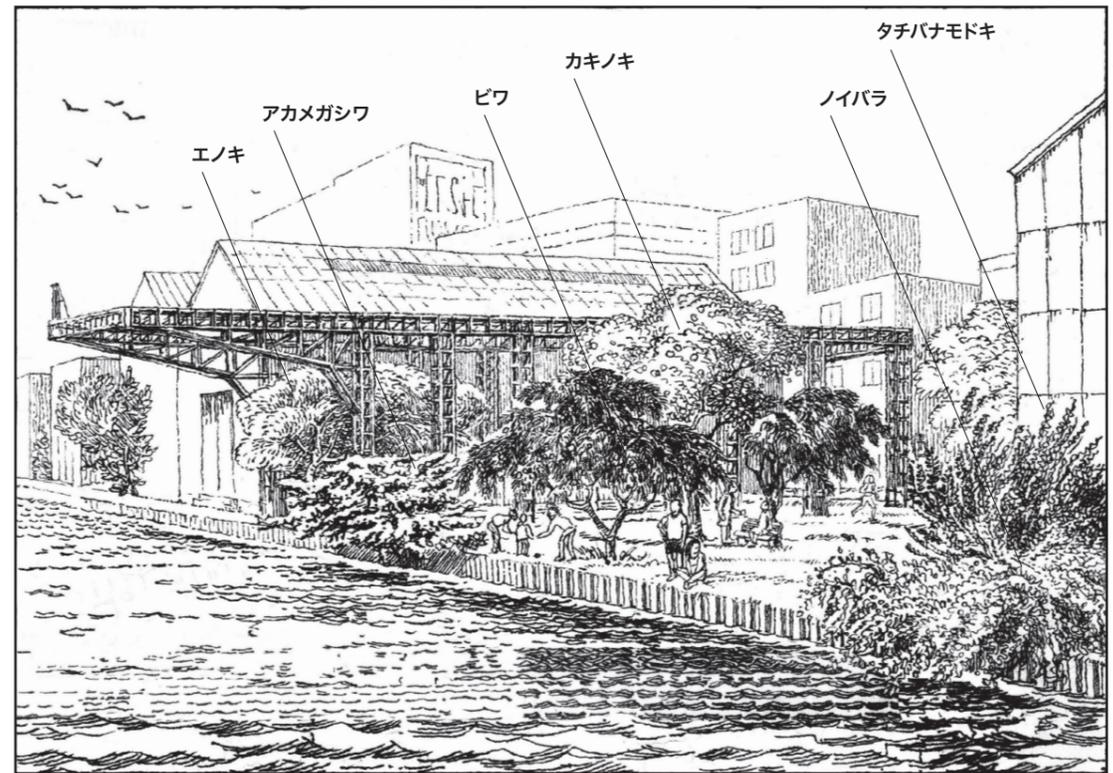
舟運が盛んだった1960年代頃までの中川運河には、ほとんど緑はありませんでした。中川運河は、河川緑地ではなく産業活動のために開かれた運河ですので、プランナーには緑化の発想はなかったと考えられます。しかし、名古屋の都市づくりに百年の計を立てた中川運河は、水運の発展から

衰退にいたる長い時を経て、都会に潤いを与える自然の一部へと変化していきました。鳥や風によって近隣市街地から運ばれた種子が遊休化した護岸地で芽生え、大木に育つ様子は、「中川・運河」という両義的な名前に込められた「半自然」が姿を現す過程を象徴しているのでしょう。

## 進化する半自然①



## 進化する半自然②



今から20年後、中川運河の半自然はどのように進化しているでしょうか。これまで沿岸用地を賃借する事業者は、各々の必要性和感覚で護岸地の植物と付き合ってきました。ときに伐採される樹木もありますし、植物群落そのものも時間とともに遷移します。そうした半自然の面白さに気づき、中川運河

を利用し、楽しむ人間のよき伴侶とすることができないでしょうか。大木に育つクスノキなどの樹種を大事にしつつ、下層植生を取り除いて歩きやすくするのが一法です(①)。自然生えの中から花や実に見ごたえのある樹種を選ぶと、やや凝った庭造りも考えられます(②)。



トウカエデ  
風が種子を運ぶ



アキニレ  
風が種子を運ぶ



シンジュ  
(ニフウルシ)  
風が種子を運ぶ



アカメガシワ  
ツグミ以外の鳥が  
種子を運ぶ



ナンキンハゼ  
すべての鳥が  
種子を運ぶ



トウネズミモチ  
すべての鳥が  
種子を運ぶ



ヒヨドリ



ツグミ



キジバト



メジロ



ムクドリ



シロハラ

種子を運ぶ鳥